

≡ 協議会創設のころ ≡

思 い 出

首 藤 佳 子

(星ヶ丘厚生年金病院図書室)

私が星ヶ丘厚生年金病院に入職したのは昭和48年8月である。「では、よろしく。」と案内された図書室は蔵書も少なく、広い部屋にポツンと机が置かれてあった。自分の抱えている「図書館」というイメージとあまりにもかけ離れた図書室を見て、一瞬心が怯んだことを思い出す。今から思えば、その当時私の病院は結核病院から総合病院へ転換して間もないころで、何もかも整備はこれからという時期であったらしい。

さて、それから仕事が始まるのであるが、私は図書館員としても新米なら、ましてや医学分野の知識は皆無であった。一方、そのころの病院は草創期の熱気に溢れ、若手の意気盛んな医師たちが診療に、勉強に励んでいた。文献を求めて来室する医師たちにとって私は何と頼りない図書館員であったことか。雑誌の略誌名を言われて、「そんな雑誌はありません。」と答えたり、院内にない文献を取り寄せて欲しいと言われ、「取り寄せるってどこから?」と聞いて、それはあなたの方がよく知っている筈でしょと呆れられたりした。こういうトンチンカンな応答は例をあげると枚挙にいとまがない。文献を探して欲しい、書誌事項を調べて欲しい、双方まじめに会話しているのだが、今思うとほとんど漫才のようなものであった。また、「希望図書のリクエストを聞いて回るだけが図書館員の仕事だと思っているのではないでしょうね。」という辛らつな意見をもらったこともあった。「君、図書館員でしょう?」と何度言われたかしのれない。それでも、毎日オロオロと仕事をしている私に助け舟を出して下さる先生方もいて、ちょっと勉強した方がいいよということで、関西医大や神戸大の医学図書館を見学させてもらったのが私の「病院図書館員」としての第一歩であった。多分、司書とはいえ限りなく素人に近い

私を一人前の司書と見なして、いきなり文献検索や相互貸借を要求してきた医師たちが偉かったのだと思う。一方、この当時私の病院から外部に依頼する文献数は年間1,000件前後にのぼっていたが、相互貸借業務の種々の取り決めも全く知らず、大学の方からも何度か注意を受けていた。病院の内外から早く一人前の司書になれとお叱りを受けているような、そんな気がした。

しかし、為すすべもない状態が半年も続き、さすがに自分の無知さ加減が徐々に身に沁みしてきた。そして、これでは仕事にならないと真剣に思い始めた。こんなに資料が乏しいなかで他の病院ではどのようにして文献を提供しているのだろうか。また図書館員の方はどこで、どんな風に医学知識やLibrarianshipを身につけられるのだろうか、誰かに教えてもらいたいと切実に思うようになった。しかし、どこかの病院にどんな図書室があるのか全く分からず、「病院要覧」を片手に呆然と毎日を過ごしていたように思う。そこで、図書館関係の雑誌を調べてみることにした。しらみつぶしに調べていくと、北野病院に朴木さん、京都市南病院に山室さんという方がいらっしゃる事が分かった。本当に連絡がとれるだろうかという不安と同業の方と初めて話せるという期待で息がつまりそうになりながら、電話をかけたことを思い出す。入職後1年近いころであった。朴木さんは既に退職された後であったが、山室さんには連絡がとれた。嬉しくて嬉しくて、数日の間は興奮気味であった。山室さんから京都市立病院の重富さんへ、そして次から次へと仲間がいることがわかった。

文献の相互利用と担当者の研修のためにグループを結成しようよという話はトントン拍子にまともになり、その年の11月には設立総会が開かれた。しかし、会の設立などは全く初体験で手際も多か

った。特に発起人3名で苦勞して考えた会則案の「役員」の項は総会でずたずたになって、当初の面影すらとどめない姿になってしまった。当初の案では役員は運営委員のみで、会長や事務局長の職名はなかったのである。しかし、当日来賓で来て下さった奈良医大の吉本さん、阪大の田中さんからもっと責任体制をしっかりした方が良いと助言をいただいた。そうだ、そうだということになったのだが、私たちは全く予想もしていなかった事態にすっかり慌ててしまった。そんな私たちを見兼ねて、来賓の方たちも立場を離れて一緒に考えてくださった。出席していた私の病院の後の図書委員長が「あれはおかしかったねえ」と後々まで笑ったものである。

もう一つ、会費についても私たちは多くの病院に参加して欲しい一心で、先達の意見を無視して年2000円という弱気な案を出してしまった。この結果、協議会は設立後数年間に互るあの無惨な自転車操業的財政難に苦しむことになったのであ

る。

このようにして協議会は活動を開始したのであるが、入職2年目にして初代の事務局長の役を仰せつかった私は、理想には燃えていたものの公文書の書き方一つ知らなかった。知らぬが仏というけれど、この場合は正に無謀というしかない。山室さん、重富さん、当時の大阪通信病院の山口さんには本当にお世話になった。また、くじけそうになる私を「それやったら、いけますやん、やってみましょうよう」と楽天的に支えてくれた初期の幹事の方たち、何かとバックアップしてくださった各病院の管理者の方たちのことは15年経った今も決して忘れられない。

つくづくと振り返ってみると、こうした多くの理解者に恵まれ、協議会は幸せな出発をしたのだと思う。

協議会の存在が、今後も新しい担当者にとって、また病院図書室にとって頼もしい支えとなることを切に願っている。

多くの方々に支えられて

山室 真知子

(京都南病院図書室)

近畿病院図書室協議会の発祥の地といえば、さしずめ設立総会を開催し、初代の会長病院でもあった星ヶ丘厚生年金病院であろう。しかし私には、一面識もない病院図書室の司書5人が電話で互いの存在を確認しあって集まった、JR大阪駅コンコースにあるあの噴水が忘れられない。その場で病院図書室の会を作ろうということになり、発起人をきめて、そこから始まったからである。

私が病院図書室にきたのは昭和41年7月、その2年前、大学図書館を退職した頃にはすでに図書館間の組織がいくつもあり相互協力活動が活発に行われていた。当院の病院図書室は零からの出発であった。院内の各部所に分散されていた図書・雑誌を中央化して、やがて大学研究室の図書室程度のものになったが、サービス活動を始める段に

なってハタと行き詰まってしまった。「当院にない文献もとれますよ。」「文献調査もします。」と前宣伝よろしく利用者の先生方を喜ばせ、リクエストを受けたものの病院図書室が入りこむ組織は一つもなかった。「病院図書室？ 病院に図書室なんてあるのですか?」、つまり全然相手にしてもらえなかったのである。結局は地元の京大、京都府立医大の図書館に依存し、そこにない文献は他の大学を紹介してもらったが、ここでもまた「当図書館は日本医学図書館協会会員外には文献の提供はしませんので悪しからず」という返事をたびたび受けた。協会の「現行医学雑誌所在目録」を購入しても当時文献依頼に応えてもらえる大学は十指に満たなかった。

その頃、日本医学図書館協会から送られてきた機関誌「医学図書館」の見本誌に準会員の入会案